

夕月船頭

常磐津 全詞章

常磐津

西沢一風 述

変化物『四季写土佐絵拙』の一段

作曲者・初演年不詳

ゆふづき すずかぜ
夕月に涼風を、まつか花火や三股の、岸に繋ぎし通ひ船、星も欺く賑ひは、確か違はぬ彼奴が
こゑ 声

ヲイ取楫

しの たば
篠を束ねて突くやうな雨に、濡れて通ふが憎かるか

アタルアタルアタルアタルあたりやす

ここ なだか よどがは
爰も名高き淀川の、流れを渡る気散じは、気も中広な緋縮緬

し むす
締めて結んだ鉢巻も其処が根生の水の恩

みすぢ いと
三筋の糸をかりぶしに

よど かはせ
淀の川瀬のナア景色をここに、曳いて上るヤレ三拾石船に、清き流れを汲む水車、廻る

まご と みなみなれざを
間毎は皆水馴棹、さいた盃蓋押へてすけりや、酔うて伏見へ管巻縄よ、斯うした所は

せんりやうまつ
千両松ヨイヨイヨイ宵の雨

あひ ひとりよふ
逢たさに一人夜深けに来たものを

きりど
ちよつと切戸を開けてんかいなあけてんかいなお隣さん

ぎいたく やど
モシお在宅かお宿かお留守さんか居ないのに、トントントンと叩いても、エエエエ

じれつた
自烈度いではないかいな

二上り
「二上り」 させば出て行くささねば行かぬ、さして下んせヲイ船頭さん、

おもしろ
ヲイヲイヲイヲイあゝの声は嬉しからうぢやないかいな面白や

やたいばやし
屋台囃子にそやされて、浮れうかれて走り行く